

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592828

研究課題名（和文） 青年期女性の性の実態に即した避妊・性感染症予防教育プログラムの開発と検証

研究課題名（英文） The development of an educational program for preventing conception and STD/STI in young women in Japan

研究代表者

工藤 美子（KUDO YOSHIKO）

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：40234455

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、青年期女性が妊娠や性感染症に対し予防行動を確実に実行できるための効果的な教育プログラムを開発することである。そのため、10代後半から20代前半の若者の性行動の実態や性交渉に対する態度・価値観などを質問紙調査（男性122人；26.6%、女性336人；73.4%）と面接調査（男性13人；41.9%、女性18人；58.1%）にて把握した。その結果に基づき、教育プログラム実施時に使用するパンフレット「妊娠と性感染症」を作成した。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this study were to develop an effective education program so that Japanese young females from their late teens to early twenties could take action faithfully to prevent conception and STD/STI. 458 young people completed a questionnaire survey regarding HIV/STD-related knowledge, attitudes towards contraception and sex, the risk perceptions for pregnancy and HIV/STDs, self-efficacy in condom use, and sexual behavior. Thirty-one young people were asked open-ended questions regarding participants' sexual protective strategies and relationships with their partners in interviews. A pamphlet for preventing conception and STD/STI were made based on the results of the questionnaire survey and interviews.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：女性・避妊・性感染症予防・行動変容・看護学

## 1. 研究開始当初の背景

日本の若者の性交経験の低年齢化とともに、HIV感染をはじめとする性感染症の増加

や人工妊娠中絶実施率の増加が問題となっている。日本の若者に対する性感染症や妊娠の予防に対する取り組みは、おもに学校教育

の一環として行われているが、年1回程度の医療職やピア（仲間）による教育に頼っているのが現状である。さらに、それらの取り組みの評価は、受講後の感想文や質問紙調査による意識や態度の変化に関するものが多く、若者の予防行動の実行にどのように効果があるか検証されていない。

一方、欧米、特に米国では行動理論に基づく介入プログラムの効果が心理社会的要因とあわせて行動変容の点から多数実証され、効果的な予防教育プログラムの特徴なども明らかにされている。避妊や性感染症予防のためのプログラムは、対象となる人々に受け入れられ、彼らの生活、言葉、価値観を反映した内容であることが望ましく、それにより行動変容の効果も高くなるといわれている。そこで、応募者は、これら若者実態やニーズにあった予防教育プログラムを開発することが必要と捉え、平成17年～19年に青年期男女の性に関するニーズを質的調査で把握し、男女共通のHIV感染予防教育プログラムを開発し、その検証を試みた。その結果、男性と女性では、性行動に違いがみられたことから、性差を考慮に入れたプログラムの開発が必要であること、対象のニーズを捉えるには、対象の実態を質的・量的な視点から捉えることの必要性が示された。したがって、本研究課題では、より対象のニーズに即した予防教育プログラムを開発するために、質的・量的な研究手法により対象の実態を把握し、性差を考慮に入れた教育プログラムの開発に着手することとし、第1段階として女性を対象としたプログラム開発に取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

- (1) 青年期女性の避妊・性感染症に関する知識・性に対する価値観・性行動などの実態を質的・量的に明らかにする。
- (2) 実態調査をもとに、女性のニーズに即し

た避妊・性感染予防教育プログラムを開発・検証する。

## 3. 研究の方法

10代後半から20代前半の若者に対し、性行動の実態、性交渉に対する態度・価値観などを量的（質問紙調査）、質的（個人面接あるいはグループインタビュー）調査により把握した。

### (1) 質問紙調査

無記名による質問紙調査を3回実施した。第2回調査は、第1回調査の1ヶ月後、第3回調査は、第1回調査の3ヶ月後に実施した。3回の測定結果は、プログラムの有効性を検証する際のコントロール群とする。

基本属性ならびに情報動機づけ行動スキルモデル（Information-Motivation-Behavioral Skill Model: IMBモデル; Fisher & Fisher, 1992）の構成概念に関連する項目を質問紙にて調査した。

#### ①基本属性

年齢、性別、所属（大学・専門学校・予備校・高等学校及び学年）、現在の居住状態（一人暮らし・家族と同居・その他）の回答を研究協力者から得た。さらに、性的活動に関連して、現在の交際相手の有無、これまでの性交経験の有無、これまでの性交渉の相手の人数、初交時の年齢、初交時のコンドーム使用の有無の回答も得た。

#### ②情報

情報は、厚生省 HIV 感染症の疫学研究班行動科学研究グループ（2001）が開発した「HIV/STD 関連知識 20 項目」と「避妊関連知識 10 項目」を用いた。「HIV/STD 関連知識 20 項目」は、HIV の感染経路、検査に関する情報、STD の種類や感染、HIV 感染との相互作用についての質問からなる。「避妊関連知識 10 項目」は、コンドームやピルに関する知識、妊娠しやすい時期に関する質問である。この

調査項目は、研究者が作成したものであり、避妊知識を調査した5研究(剣, 2003; 佐藤, 齋藤, 木村, 2006; 蒲池, 他, 2007; 種部, 2007; 金井, 小西, 2007)で知識項目として提示された共通項目を選択した。

### ③動機づけ

動機づけは、「避妊法に対する態度」、「性交渉に対する態度」ならびに「妊娠やHIV/STD感染に対するリスク認知」の3つの尺度を用いた。「避妊法に対する態度」(福本, 森永, 2005)は、「避妊法に対する態度」は、「コンドームに対する回避傾向」7項目、「コンドーム使用に対する積極性と使用する人に対する信頼感」7項目、「膣外射精および使用する人に対する信頼感」5項目、「膣外射精に対する拒否感」3項目の計22項目の5件法の尺度である。4下位尺度のそれぞれの $\alpha$ 係数は0.71~0.84である。

「性交渉に対する態度」(福本, 森永, 2005)は、10項目5件法の尺度で、「性交渉に関する性の二重規範」と「性交渉に対する開放性」の2因子で構成され、性交渉に対する規範を測定している。それぞれの $\alpha$ 係数は0.71、0.69である。

リスクに対する脆弱性として、「妊娠に対するリスク認知」(福本, 森永, 2005)ならびに「HIV・STD感染に対するリスク認知」を測定した。コンドーム法や膣外射精法を単独で使用する場合の妊娠する可能性を0~100%の数値で測定する。本研究では、避妊行動をとらないことを選択している若者もいることから、コンドーム法や膣外射精法を単独で使用する場合に加え、何も使用しないで性交渉する場合の妊娠する可能性やHIV・STDに感染する可能性を0~100%の数値で測定した。

### ④行動スキル

行動スキルは、「コンドーム使用提案時の反応予測」と「自己効力感尺度」で評価する。

「コンドーム使用提案時の反応予測」は、コンドームの使用を提案するときや使用する際の反応を9項目5件法で測定し、「自己の嫌悪・拒否」(3項目)、「パートナーの嫌悪・拒否認知」(3項目)、「安心・困惑」(3項目)の3因子からなる。 $\alpha$ 係数は、0.79、0.82、0.68である。「自己効力感尺度」(福本, 森永, 2005)は、コンドーム使用に関する自己効力感を6項目の尺度で測定し、 $\alpha$ 係数は0.81である。

### ⑤コンドーム使用行動

コンドーム使用に関する行動は、最近1ヶ月間の性交経験の有無、過去1ヶ月間のコンドームの使用頻度、過去1ヶ月間の膣外射精の頻度、一番最近の膣性交時のコンドームの使用の有無と膣外射精の有無、性交コンドームの購入の有無、コンドームの携帯の有無、パートナーとコンドームの使用について話した頻度である。

## (2) 面接調査

調査内容を以下に示す。

### ①基本属性

年齢、性別、学年、セックスの経験と人数、コンドームの使用状況とその理由を自記式質問紙にて回答を得た。

### ②面接

調査内容は、性的なパートナーとの関係性におけるジェンダー役割や期待、性感染症予防や避妊に関して実行している方法、性交経験についてのさまざまな価値観、信念、性的パートナーとの関係性の中での会話や交渉の実際や性感染症予防や避妊についての関心や意見などを聴取した。

### (3) 倫理的配慮

質問紙調査ならびに面接調査の実施にあたっては、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認(平成 21

年度教員-15)を得て実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 質問紙調査

10代後半から20代前半の若者458人の調査結果を分析した。男性122人(26.6%)、女性336人(73.4%)であり、平均年齢17.9±2.1歳であった。学校別では、高校生110人(24.0%)、大学生343人(74.9%)、大学院生5人(1.1%)であった。大学生には一般大学生と看護系大学生が含まれる。

##### ①男女の比較

###### <性行動>

性行動において、男女を比較したところ、過去1ヶ月間性交渉経験者のコンドーム使用に有意差を認め、毎回使用者の割合が男性13人(40.6%)に対し女性76人(68.5%)と高く、一度も使わなかったと回答した者の割合が男性6人(18.8%)に対し女性9人(8.1%)と少なかった。また、1ヶ月間にコンドームを使用しようとする者の割合が男性よりも女性が有意に高かったが、1ヶ月間のコンドームを使用しようと言う割合は女性よりも男性が有意に高かった。

一般大学生では、過去1ヶ月間での性交渉の有無に男女で有意な違いが認められたが、それ以外の性行動について違いはなかった。看護系大学生の性行動では、男性の毎回使用者の割合(60.0%)が女性の割合(47.5%)よりも有意に高かった。高校生の性行動では、男女に有意差は認めなかった。

回答者全員に1ヶ月間のコンドームの購入の有無を尋ねたところ、女性は男性に比べ購入しなかった者の割合が有意に高かった。学校別の男女比較では、看護系の大学生、高校生において、この傾向が見られた。高校生では、特に性交渉経験のある男性は、女性に比べコンドームを有意に購入していた。

###### <情報・動機づけ・行動スキル>

所属の学校や性交渉経験の有無により、情報・動機づけ・行動スキルが異なる可能性があるため、学校別ならびに性交渉経験別に男女を比較した。

##### 一般大学生・性交渉経験者

避妊関連知識の正答数は男性よりも女性のほうが有意に多かった。女性は男性に比べ、コンドームに対する回避傾向は有意に低く、コンドームに対する積極性と使用する人に対する信頼感は有意に高く、性に対する二重規範や開放性は有意に低かった。STD感染症に対するリスク認知では、コンドーム使用時の感染の可能性や何も使用しないときの感染の可能性を、男性に比べ女性のほうが有意に高く評価していた。さらに、コンドーム使用に関する自己効力感は、女性よりも男性のほうが有意に高かった。

##### 一般大学生・性交渉未経験者

女性は男性に比べ、コンドームに対する回避傾向や膣外射精および使用する人に対する信頼感、性に対する二重規範や開放性は有意に低く、コンドームに対する積極性と使用する人に対する信頼感は有意に高かった。また、妊娠に対するリスク認知では、膣外射精時の妊娠の可能性を、女性は男性に比べ有意に高く評価した。

##### 看護系大学生・性交渉経験者

女性は男性に比べ、コンドームに対する積極性と使用する人に対する信頼感は有意に高く、膣外射精および使用する人に対する信頼感は有意に低かった。また、妊娠に対するリスク認知では、膣外射精時の妊娠の可能性を、女性は男性に比べ有意に高く評価した。

##### 看護系大学生・性交渉未経験者

HIV/STD関連知識の正答数は男性よりも女性のほうが有意に多かった。女性は男性に比べ、コンドームに対する回避傾向は有意に低く、膣外射精および使用する人に対する信頼

感は女性のほうが男性よりも有意に低かった。

#### 高校生・性交渉経験者

女性は男性に比べ、コンドームに対する回避傾向や性に対する開放性は有意に低く、コンドームに対する積極性と使用する人に対する信頼感は有意に高かった。また、女性は男性に比べ、HIV 感染に対するリスク認知における膈外射精時の感染の可能性と STD 感染に対するリスク認知における何も使用しないときの感染の可能性を有意に高く評価した。

#### 高校生・性交渉未経験者

女性は男性に比べコンドームに対する積極性と使用する人に対する信頼感が有意に高かった。妊娠に対するリスク認知では、女性は男性よりもコンドーム使用時の妊娠の可能性や膈外射精時の妊娠の可能性を有意に高く評価し、HIV 感染に対するリスク認知ならびに STD 感染に対するリスク認知におけるコンドーム使用時の感染の可能性も有意に高く評価した。

#### まとめ

男女による性行動の明確な違いは、認められなかった。情報・動機づけ・行動スキルでは、女性は男性に比べコンドームを使用する動機づけは高いと考えられた。

#### (2) 面接調査

平均年齢 18.5±2.4 歳 (男性: 19.2±2.7 歳、女性: 18.0±2.0 歳) の男性 13 人と女性 18 人の計 31 人の研究協力が得られた。このうち、性交渉経験が有る者は 20 人 (64.5%)、無いた者が 11 人 (35.5%) であった。

面接調査で得られた結果は、男女ともに性行為に伴って性感染症よりも妊娠することを恐れていた。女性は「生理が遅れると不安」であり、「子どもができたらどうしようと不安になる」「後で後悔する」と述べる一方で、

「生理が遅れたら、1 ヶ月ぐらい着けてやるけど、また忘れちゃう。」と「生理が遅れた不安さは持続しない」とも述べていた。さらに、「今までできてないからできない」「大丈夫だよねって言われたら、うん、大丈夫だよみたいな」というように根拠はないが「妊娠しない」という感覚も持っていた。また、「コンドームは途中で着ける」「中を出さなければ大丈夫」「コンドームを使わず膈外射精する状況がある」とコンドームを使用しない・あるいは正しく使用しないで性交渉を行っている実態があった。一方で、「今やりたいことあるから、今はちゃんと着けようみたいな。夢があるから、それをお互い崩したくない」と「やりたいことあるからコンドーム着ける」と先をみすえた行動もとっていた。

#### まとめ

面接調査では、不確かな知識の中で、妊娠を回避する行動がとられていない状況や、男女の関係性の有り様で避妊や性感染症予防行動が左右される状況がみられた。

#### (3) プログラムの開発

量的・質的調査結果をもとに教育プログラム実施時に使用するパンフレット「妊娠と性感染症」を作成した。パンフレットの内容は、女性が最も心配する妊娠に関連した事項 (月経と妊娠のしくみ) を最初に記述した。さらに、女性は月経の正常性についての心配を抱えやすいため、正常な月経の周期を示すとともに、自分の体の状態を知ることにつながるために、月経記録を促す内容を加えた。また、女子高校生・大学生は、月経開始日を入力することで、排卵や月経開始日を携帯のアドレスに知らせるといった Web サイトを利用していることから、その URL も掲載し自分の体の変化を知るための方法も記した。次に、コンドームの脱落や破損による避妊の失敗があるため、そのような時の対処法としての緊急避

妊法の解説と利用の仕方をパンフレットに記載した。さらに、コンドームの正しい装着方法をクイズ形式で提示し、そのクイズに対する正解を解説した。また、女性にとっては、コンドーム法よりも経口避妊薬の服用が確実な避妊につながるがその知識の不確かさが質的研究で明らかになったため、ピルの効果や服用方法なども記載した。一方、男性コンドームの使用には、男性が避妊に協力することが求められるため、男女の関係性の有りをデート DV と絡めて記載した。最後に、性感染症の伝搬の様式を解説するとともに、若者に注意を促したい性感染症（性器クラミジア、淋疾、尖圭コンジローマ、HIV）を解説した。このパンフレットの特徴は女の子3人の会話を提示し、身近な話題として示した点にある。なお、今後はこのパンフレットを用いた教育の実施・評価が今後の課題である。

#### <引用文献>

Fisher, J.D. & Fisher, W.A. (1992). Changing AIDS-risk behavior. *Psychological Bulletin*, 111(3), 455-474.

福本環, 森永康子(2005). 男女大学生の避妊行動に関する研究—愛情を感じる相手との最も最近の性交渉において—. *母性衛生*, 46(1), 143-153.

蒲池恵美、能塚彩、酒井章江、澤部なぎさ、古川千絵理、渡邊歩美、平田伸子、新小田春美、加来恒壽、野口ゆかり(2007) 大学生の月経周期・性交・避妊についての知識・動機・行動および自尊感情との関連に関する研究. *母性衛生*, 48(1)97-105.

金井誠、小西郁生(2007) 大学入学時における性感染症および人工妊娠中絶に関連する意識調査と e-Learning システム講義の有用性. *日本性感染症学会誌*,

18(1)32-39.

佐藤友佳、齋藤益子、木村好秀(2006) 高校生の避妊知識と避妊行動に関する検討. *思春期学*, 24(2)384-391.

種部恭子(2007) 性の健康教育の時期と効果に関する検討. *日本性感染症学会誌*, 18(1)32-39.

厚生省 HIV 感染症の疫学研究班行動科学研究グループ(2001). 日本人の HIV/STD 関連知識、性行動、性意識についての全国調査—日本人の HIV/STD 関連知識、性行動、性意識に関する性・年齢別分析—. *教育アンケート調査年鑑上巻*. 94-105, 東京: 創育社

劔陽子(2003). 福岡県の定時制高校5校における性行動・性意識調査. *日性感染症学会誌*, 14(1), 42-51.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

工藤 美子 (KUDO YOSHIKO)  
兵庫県立大学・看護学部・教授  
研究者番号: 40234455